



Title	夫婦間会話における対立的場面分析：ポライトネス理論に関する一考察
Author(s)	大塚, 生子
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59894
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	おおつかせいこ 大塚 生 子
博士の専攻分野の名称	博 士（言語文化学）
学 位 記 番 号	第 2 5 7 5 5 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 25 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学 位 論 文 名	夫婦間会話における対立的場面分析 ーポライトネス理論に関する一考察ー
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 三牧 陽子 (副査) 教 授 森 祐司 准教授 瀧田 恵巳

論 文 内 容 の 要 旨

本研究では、夫婦間の対立的場面の談話分析を通し、これを分析可能な枠組みとしてBrown and Levinson(1987, 以下B&L)のポライトネス理論を捉え直すことを目的とした考察を行った。分析に際しては、近年ポライトネス研究の分野で主流となってきた言説(談話)的アプローチ(discursive approach)と同様、実際の会話参加者の会話における認識を重視した、質的分析を試みた。

まず、第2章では、本研究の主要概念であるポライトネス理論を概観し、分析に用いる相互作用の社会言語学の中の「フレーム」「コンテクスト化の合図」「会話スタイル」について説明を行った。

B&Lのモデルに対する批判は、大きく2種類に分けることができる。1つは、B&Lのモデル内の問題に対する批判である。FTA度合い見積もりの際の諸要素の妥当性や、フェイスの捉え方の不十分さなどに対する批判がそれにあたる。もう1つは、アプローチそのものに対する批判である。分析に、聞き手の視点や会話参加者の評価が入っていないという批判などは、B&Lの演繹的方法による合理主義的アプローチに対する批判だといえる。本研究では、会話参加者の認識によるポライト／インポライトを問題として取り上げることにより、配慮(非配慮)に関する1つの社会の型を明らかにしようという点では、言説的アプローチの手法を用いているといえるが、これまで数多くの実証研究に裏打ちされてきたB&Lのモデルにも、否定することのできない範型が表れているように思われる。従って、談話例の考察を通して、B&Lでは捉えられない点について、実証研究に基づいて捉えなおし、新たな枠組みを模索した。

分析を通し、B&Lで説明ができないのは特に、①自己のフェイス②デフォルト③インポライトネスの3点だと考え、これらについて枠組みを捉えなおす試みを行った(第5章～第7章)。

第3章では、「対立」「親密さ」「男女の会話スタイル」に関する内外の諸研究について概観し、第4章では本研究で用いる会話記録について説明した。本研究で用いる会話記録は、7組の夫婦(20代後半～30代前半)による自由会話で、記録合計時間は13時間24分である。この中から、対立的場面を抽出し、分析対象とした。

分析に関し、まず、第5章では、「自己のフェイス」についての分析を行った。B&Lのモデルのカギ概念であるフェイスは、Goffman(1967)のフェイス概念に基づいている。しかし、Goffmanでは相互行為の際、相手のフェイスと同様に重視されていた自己のフェイスを保持するという観点が、B&Lでは十分に考慮に入れられていないといえる。この点について、談話例分析および諸研究の概観から、フェイスにはB&Lのポジティブ・フェイス／ネガティブ・フェイスという2種類のフェイスでは説明のできない、アイデンティティ・自己イメージを表明したいという側面があるのではないかと考えた。滝浦(2005)で指摘されているように、B&Lのフェイスの捉え方は、相手への接近と離反という、相互行為における人間関係の距離に関わるものであるといえるが、一方で、人は場面にに応じて表明したい「自己イメージ」を持っており、それを表明することはしばしば、相互行為上「良い人」という評価を受けることと対立する。

このことから、本研究では、個人のもつフェイスを、「自己志向のフェイス」と「他者志向のフェイス」から構成されるものと捉えた。

「自己志向のフェイス」とは、他者に、その場その場に応じた自己イメージ・アイデンティティを示したい、理解されたいという欲求で、「他者志向のフェイス」とは、他者のフェイスへの配慮を行うことで、他者のフェイス欲求を満たすと共に、自分自身も相互行為に値する「良い人間」であることを示したいという欲求である。

これに基づいて考察を行うと、話し手からFTAを受けた際、フェイスを侵害された聞き手は、他者(相互行為における「相手」)のフェイスに対する配慮を行うことよりも、傷ついた自己のフェイスを補償・保持することを選択し、以下の2種類の方法を用いてそれを表明していることが観察された。

①「自己補償」:「言い訳」など、侵害された自己のフェイスを自分自身の行為によって繕う方法

②「FTAの報復」: 侵害された自己のフェイスを補償するため、相手に対してFTAを行い、自己のフェイスを相対的に回復させる方法

談話例からはこの2つの方法しか観察されなかったが、実際には他にも別の方法を用いて自己のフェイスを補償する方法がある可能性がある。また、日常会話では、相手からのFTAを受けていない場面でも、相互行為中には自己志向のフェイスと他者志向のフェイスのどちらに比重を置くのかというバランスによって、発話を決定していると考えられる。このような発話産出の際のメカニズムを、「フェイス・バランス」と名付けた。

次に、第6章では、会話における「デフォルト」について考察を行った。ポライトネス研究では近年、前述したように、理論のために理論を構築するのではなく、実際の社会生活において、会話参加者らがその会話をどのように捉えているかを対象に分析を行うべきであるとの主張がなされている(Watts, 2003; 宇佐美, 2001等)。つまり、会話参加者らが、「普通の状態」から逸脱し、実際に「ポライト／インポライト」と感じたものについて研究を行うべきだという観点である。本研究ではこのような「普通の状態」を「デフォルト」と呼ぶ。すなわち、デフォルトとは、ある発話が聞き手にとって、無標の状態、つまり意識されず当然のものと見なされている状態を指す。

デフォルトの設定には、これまでも言われてきた「社会的規範」とは別に、夫婦間会話においては、「個人的習慣」を考慮に入れなければ説明できない場面が観察された。そして、相互行為においてデフォルトを決定する要因となるのは、フレーム内の期待であると考えられるのではないかとという提案を行った。

また、従来のデフォルトの捉え方は、デフォルトから逸脱したものは、即「ポライト」あるいは「インポライト」という評価付けが行われるものとされてきたが、夫婦間会話を考察すると、デフォルトとは異なり、「意識には上るけれども、当該フレーム内における相手の習慣的会話スタイルの一部として了承し、ポライトともインポライトとも評価しない」という領域があることがわかった。本研究ではその状態を「有標的無評価」の状態と名付け、「無標・無評価」であるデフォルトとは区別すべきだと結論づけた。これら2つの状態を、ポライトともインポライトとも判断されない、無評価の状態として、ポライト／インポライトの評価が行われるものとは区別する必要があるといえる。

第7章で取り上げた「インポライトネス」については、これまで長い間、「ポライトネスの失敗」と捉えられてきたために、分析の枠組みがポライトネスよりもさらに混乱している状態にあるといえる。これまで行われてきた語用論的インポライトネス研究では、話し手のFTA意図が、インポライトネスを捉える際の主たる要因とされてきたといえる。また、聞き手の視点を考慮に入れている研究についても、聞き手による話し手のFTA意図の解釈と、実際のFTA効果という点が混同されているため、これらを分けて考える必要性を提示し、インポライトネス研究は、「話し手のFTA意図」「聞き手による話し手FTA意図の解釈」「実際に聞き手に及ぼすFTA効果」の組み合わせで考えなければならないという主張を行った。また、相互行為分析としては、聞き手がFTA効果を受けた後のフィードバックまで考慮に入れるべきであると考えている。フィードバックについては、5章の「フェイス・バランス」と関連させて考えることができる。すなわち、「フェイス・バランス」は、相互行為中の「聞き手に及ぼすFTA効果」を基に、聞き手が話し手へと移行して発話を行う際、自己と他者どちらのフェイスに比重を置くかを考え、どのように実際の発話としてのフィードバックを行うかを表すものであると説明することができる。また、インポライトネス場面におけるFTAの実行に関しては、①方略的FTA ②感情的FTAの2種類が、談話例から明らかになった。

方略的FTAは、伝えたい発話内容があり、かつFTA自体を行いたい(相手のフェイスを侵害したい)という欲求がある場合に、これら2つを効果的に伝えることを目指して方略的に表現を選択することによって、実現しようとするものである。談話例ではディスコースレベルで表明されており、状況その他の要素を考慮に入れ、方略的に表明されているものといえる。一方の感情的FTAでは、FTAを行いたいという欲求が先立つ場面が見られた。談話例では一発話によって表明され、相手のアイデンティティや能力に対する批判という発話の内容によって、非常に高一度合いのFTAを表明しているものが観察されている。また、インポライトネスをディスコースレベル、メタ・ディスコースレベルで捉える必要性についても示唆を行った。

最後に、これら3つの観点から行った考察を統合し、1つのモデルを提示した。これは、本研究における会話参加者の認識を基にしたもので、デフォルトと有標的無評価エリア(合わせて「無評価エリア」)を中心に、自己志向のフェイスと他者志向のフェイスとのバランスから、他者志向のフェイスに比重を置く場合にはその程度に応じたストラテジーの使用によって、FEA(Face Enhancing Acts)を付加することで有標的にポライトになり、反対に自己志向のフェイスに比重を置く場合には、場合によってはFTA(Face Threatening Acts)を付加して有標的にインポライトになると考えるものである。B&Lがポライトネスを、FTA軽減行動と捉えているのに対し、このモデルでは会話参加者の認識を基に、ポライトネス／インポライトネスを、無評価エリアからの付加的ストラテジーによって有標になるものとするものである。そして、このモデルにおいては、B&Lのポライトネス理論は、「ポライトネス」の理論ではなく、デフォルトと有標的無評価の中に含まれるモデルだと考えることができるのではないかという提案を行った。ただし、FEAについては本研究では実証的に明らかにすることができなかったため、今後検証の必要があると思われる。

論文審査の結果の要旨

本論文は、夫婦間の自然会話の中から抽出した対立的場面をポライトネスの観点から談話分析することによって、その「対立」のFTA(フェイス侵害行為)に関する諸特徴を解明するとともに、ポライトネス理論研究の「範型」の位置を占めるBrown & Levinson(以下、B&L)の理論に新たな修正・拡大を提案するものである。

本論文の価値は、研究対象の新規性と、ポライトネス理論への貢献にある。

円滑なコミュニケーションを志向する従来のポライトネス研究の観点だけでは不十分であるとの認識から、インポライトネスも観察可能な対立的場面を分析対象とし、そのデータとして最も遠慮がないとされる夫婦間会話を選定した。夫婦間という最も親密な関係における7組の夫婦の計13時間に及ぶインフォーマルな日常会話を収集し、フォローアップインタビューも併用して会話参加者の認識も重視し、その相互行為を質的に分析する手法を採っている。本論文が扱う夫婦間という関係については、従来データ収集が困難であることから談話研究の対象とされていなかったものであり、このデータ自体に既に十分な学術的価値が認められる。また、夫婦間の「対立」に関連する「親密さ」や「男女間の会話スタイル」などに関する先行研究も十分に吟味した上で論じられている点も評価できる。

ポライトネス理論をより包括的に再構築するために重要な観点として分析・検討されたのは、(1)自己のフェイス保持、(2)デフォルトの観点、(3)インポライトネス研究の枠組みの3点である。詳細な分析・考察の結果は、多くの意欲的な提案として提示されている。まず、自己のフェイスが脅かされたと感じた場合、言い訳などの「自己補償」や、「FTAの報復」というストラテジーを用いた例を元に、「他者志向の自己フェイス」「自己志向の自己フェイス」という概念を立て、他者のフェイス保持に力点が置かれてきたB&Lの枠組みとは異なり、自己のフェイス保持欲求のために「自己志向の自己フェイス」に比重を置くこともあると説く。また、他人には夫婦げんかとも見えても本人達にとっては特にFTAとは意識されない例を元にデフォルトを論じ、さらに逸脱が有標となっても直ちに「ポライト」「インポライト」とは評価されない状態、即ち「有標的無評価エリア」の存在を指摘した。インポライトネスに関しては、「話し手のFTA意図」「聞き手による話し手FTA意図の解釈」「聞き手に及ぼすFTA効果」「フィードバック」まで合わせて考慮すること、および、メタディスコースレベルで捉える必要性を論じた。いずれも興味深い具体例の鮮やかな談話分析に基づき、豊富な先行研究を縦横に駆使して理論構築へと向かう考察には説得力がある。

最後に、以上の論点を総合した「ポライトネスモデル図」によって、B&Lの論じた範囲を包含し、より包括的にポライトネスを捉えるための全体像を提案している。本人も今後の課題としてさらなる精緻化を挙げている通り、細部には検討の余地が残るが、その大胆な提案は意欲的な取り組みとして評価できる。今後のさらなる発展につながるポライトネス理論研究の方向性を示した意義は大きい。

以上から、本論文は博士(言語文化学)の学位論文として価値あるものと認める。